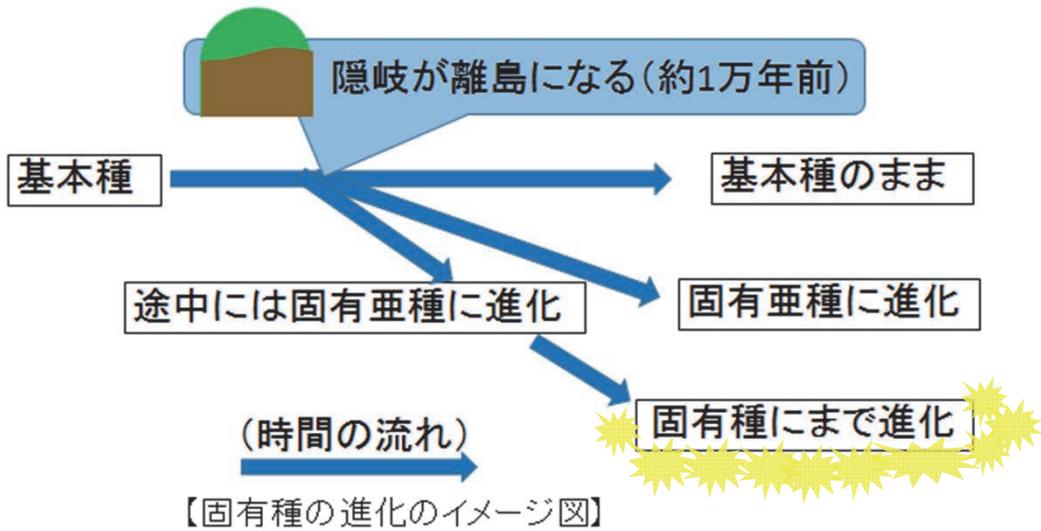




ジオパーク 成り立ち編 ④ 固有種



隠

岐諸島が離島になったという地史による生物への影響は、氷期の生き残りの「北方系、高山性」の生物の存在だけではありません。約1万年前から本土と隔離された環境が続いたことにより、その場所により適応するように体のつくりを変え始めた生物がでてきたのです。「固有種」の誕生です。

「固有種」とは、その国、あるいはその地域でしか存在しない生物学上の種で、特産種とも言います。大陸などから隔絶されている離島などで多く見られます。地域個体群の絶滅が、即座にその種そのものの絶滅につながるため、保護の対象としても大変重要です。なお、隠岐諸島で「固有種」という場合、「固有亜種」も含んでいます。本土側にいる似た種類の生物と、外見などではっきり違いが確認出来るか出来ないか微妙、というのが亜種レベルの違いです。端的に説明すると、基となった原種とかなり違うのが「固有種」、よく似ているけどちょっと違うところがあるのが「固有亜種」なのです。例えば、隠岐の「固有種」として挙げられている植物の中では、オキタンポポやタケシマシウドは「固有種」、オキノアザミ、オキシクナゲ、オキノアブラギクが「固有亜種」、一般的に「固有種」と呼ばれているタクヒデダは「交雑種」とであるとされています。長い間海に隔てられた環境となったことにより、本土にいる同じ種と交配できず(=生殖的隔離)、遺伝子の交流がないまま進化した結果の形なのです。「固有種」と「固有亜種」の差は進化の過程における時間軸の長さの違いで起こりうると考えられています。つまり、隔離された環境が長ければ「固有種」にまでなりますが、

それほど長い時間でなければ「固有亜種」レベルまでには進化しないということです。もちろんここでいう時間とは万年レベルのこととなります。

隠岐諸島が現在のような離島として独立したのは約1万年前といわれています。1万年は生物が独自の進化を遂げるためにはかなり短い時間とされており、「固有種」のような完全に別の形態までには進化しにくいと考えられます。現状として、隠岐諸島独自の生物はほとんど「固有亜種」であり進化の過程にある生物、つまり、形態が変わりつつある途中の段階なのです。「固有亜種」は、観光面から見ると、進化の基となった原種との形態的な相違点がわかりにくく、隠岐の独自の生物であるということが伝えにくい、つまり「パッと見ても違いがよくわからない」という弱点はありますが、学術面から見たときには、進化の過程がみられるという価値は大きいといえます。

ここで勘違いのないようにお話しておきますが、離島となり長い時間本土と離れていたとしても、すべての生物が「固有種」になるわけではありません。とても多くの生物がいる中でも、「固有種」になりやすいものもそうでないものがあります。これは、どういうことでしょうか。

続きは次号以降でまたお話しさせていただきます。

〔海士町文化財保護審議委員
深谷 治〕

